

愛護若時箱

作者紀海音

眞 鹿言軟語皆第一義に歸し。治生産業
おのづから實相に背かず。智門は高きを
勝れたりとし。悲門は下れるを妙なりと
す。低き人の丈較べはひききを勝ちとす
るが如し。無相の法身皆一智毘盧の全體
なり。暫らく劣機に近づきて強剛の衆生
を利す。和光同塵神津國幾萬代の末久に。
豊秋津洲の御主。仁明天皇のオロシ御聖
徳へ傳へ聞くこそ。有難き。眠近多
き其中に二條の左大臣清平公。古今に秀
でし英才なり。又六條の右大將有雄卿と
聞えしは。させる學智もなけれども御外
戚の威を振るひ。我より上に立つ人を嫉
み妬んで色々と。讒者の唇動くこそ。道
明らけき九重のフツ月に。雲ある如くな
り。然るに春の末よりも天皇御不豫の
事ありて。壹の御坐に垂籠めて打臥し惱
ませ給ふ故。當時の名醫入り代り倉公
華陀が手をつくし。陰陽の頭當年の星を
勘へ易を繰り。諸寺の高僧壇上に孔雀明
王樂師の法。丹誠無二の御祈禱もいまだ
效驗見えざれば。月卿雲客堂上に額を鳩
め氣を痛め。武官の輩は庭上に弓矢た挾
み居流れて。縦へ變化の業なりとも目に
だに懸らば射伏せんと。思ひ込んだる有
様は。嚴めしうこそ見えにけれ。
かゝる所へ比叡山帥の阿闍梨參内あり。
謹んで宣ふは。玉體御惱の御祈り山門
は申すに及ばず。諸寺諸山の僧徒ども至
情を抽んで候へども。更に效驗あらぬ事
不思議の思ひをなす所に。老僧夜前あら
たなる瑞夢を蒙る其意趣は。此度帝の御
祈願には神明和光の力を頼み。王城の未
申別雷山の麓にて。流鱗馬を興行し二條
の家には傳はりし。降天の唐鞍を明三歳
の駒に置き。同じく刃の太刀を佩き清平
公の長男。愛護の若に勤めさせ神慮をす
すしめ奉らば。玉體長久たるべしとの
神勅猶豫に渡らずと。畏れ入つて奏聞あ
り。月卿雲客一同に是は希代の靈夢
やと。冠を傾ぶけおはします。六
條の右大將會釋もなく進み出で。御坊
は老にほられて筋なき事を言はる。
な。夢は五臟のなす所善惡共に信するに
足らず。其上山々嶽々にて行徳兼備の高
僧ども。肝膽を碎きてさへしか／＼とな
き御勞り。何ぞや俗家の武器馬具にて年
端も行かぬ愛護の若。流鱗馬の曲した
ればとて如何なる神が愛で給ひ。御惱平

安なるべきぞ、ン、傍痛しと嘲笑ふ。清平笏取直し。粗忽に候右大将。假にも瑞夢とある事を疑ひ給ふは勿體なし。古人の夢を論ずる事眞妄邪正虚實あり。菩提心經の如くんば、佛天感應の四種あり。蓮華三界日月僧是を四つの善夢といふ。又撰寶藏經の中には、佛在世に惡大王あり。夢中に八つの不思議を見る。是を外道に尋ねれば、八難の夢運れ難し。若し寵愛の戸婆夫人を、殺さば其身の禍ひは免がるべしと勧めたり。その時佛聞し召し止んなん、八福輪の吉夢なり。必ず寶を得給はんと夢合せし給ふに。果して翌日隣國より玉の冠を捧けたり。唐土の帝王も夢を信じて國を保ち。我日の本の天皇も驚夢を感じ給ふ事。書傳に先例何とツリ、正しく宣へば。右大将氣色を損じ。よし瑞夢にもせよむね夢にもせよ。手前の行法差置いて餘所にまします神明の。

加護を頼むは何事ぞ。抑々山門昔より多くの寺領を當て行ひ。施物を費し敷ふも百王鎧護の靈場と。思つて致す所なり。但し末世に至りては佛法の威も亡び失せ。祈るに驗なきならば山門ありても益もなし。阿闍梨を始め三千の坊主どもを還俗させ。牛飼ひ舍人に使はうかどうぢや。フシどちやと睨めつくる。阿闍梨涙を拭ひ。ア、忌はしや勿體なや。非修非學の愚妄人言葉交すも穢るれど。顯密弘通の大乗を誹謗めさる不便さに。あら、語り聞かすべし佛法不思議の靈驗は末世にいよく盛んなり就中我山は。圓頓の花止觀の月上見ぬ鷲の嶺なれば。本尊の利益他に勝り行者も外に勝れたり。衆生の諸願無量にして佛智の悲願もまろなり。虚空藏の求聞持にて財寶化徳を成就し。聖天の谷油には官祿長職速かなり。壽命を祈と。世間の者に言ひなづけ逆心を企つる。

る闍魔王怨敵退治は大威徳。不動の護摩に掲焉たり金剛般若の利劍には。三毒四魔を切拂ひ五穀成就六慾怨敵七難即滅七福即生。八大金剛童子の法如法に祈念する時は。枯れ木再び花開き白骨肉を生ずれども。悲しきかなや朝廷に。無道の倭人立交り政道邪曲ある故に。王佛法衰へて本地の利益薄き故。垂迹の神明を祈るが愚僧が誤りか。別雷山に降臨ある松の尾の明神は。我山におはします大山咋の命とは。同一體の御神にて鳴鑼の神ともいひ。流鑼馬は此神の妙體。因縁故實も知らずして佛法を破却せん。僧徒を還俗せんなどと。佛敵朝敵たるべしとツ、憚り。なくぞ申されける。右大将腹を立て。ヤア賣僧坊主めぬかすまい。汝は元來清平と親しき所縁ある故に。二條の家の太刀鞍にて御懐平癒なされし

地 朝敵の與黨人彼奴引立てよとのうめけ
 ば。瀧口に伺候する駿河の前司國則。つ
 つと寄つて用捨なく小腕取つて引立つる
 を。それ制せよとの下知を受け清平公の
 郎等。早苗之介勝重庭上に立上り。君
 を惱ます變化の物。今といふ今見付けた
 り。猿にもあらず猫にもなく頭はお公家
 氣は狼。地 第六天の魔王組。佛法護持の
 名僧に敵對をなす眷屬め。射て落さんと
 大雁股きりと引絞れば。ア、これ
 これ勝重短氣なり。主人持つ身は相互ひ
 私の宿意なし。佛法話の有難さにお十念
 を授かろと。地 ひよつと爰まで出ました
 と手持ち無沙汰に手を合せ。南無阿彌
 南無阿彌く〜と狼狽へ廻りほえ廻る。泣
 き聲絶に似たりやと。堂上堂下一同に。
 ン、覚えさどつと笑ひける。地 天皇玉
 の床近く清平公を召されつゝ。阿闍梨の
 奏聞先達て朕が感ずる所なり。地 別雷山
 へ身を結び神すよしめの流鏑馬を。愛護
 の若に勤めよとの勅諭誠に有難き。家の
 面目末世の規模神の恵みに叶ひたる。直
 ぐな心の清平公。邪智貪慾は有雄卿。位
 倒しの謠は。此時。よりぞ ン、へ始まり
 ける。フシ代々経てや。地 君が千年を松
 の尾の。葉替へぬ色を流鏑馬に神すよし
 めて頼むてふ。心の的一二三埒結び廻
 す外面には。物見好きなる都人押し合ひ
 へし合ひ伸びあがり。見るもことわり今
 の世の若衆の蜜香ばしき。名さへ顔さへ
 醫さへ愛護の若は大君の。勅に従ひ陸奥
 の安達駒にあらねども。降天の唐鞍置
 き手綱操練りひらりと乗り。オ、先づ
 下へ地をぞ乗り給ふ。フシ抑も馬に七箇
 の祕事三箇の手綱五箇の咄。陰陽の鞭朝
 嵐大嵐小嵐。運びのべ足。フシ千鳥足。
 霧流しと。地 云ふ曲をしつと打つて乗
 り返し。乗廻しては引返す響の。コ、
 音はちりりんりん。障泥の音はどくく
 どうかくるく。ナ、地 くるりと輪乗り
 して。障泥をはたと打つ程に。フシ四足を
 宙に駆出す。地 馬上に番白羽の矢か
 の養由が柳的的。三度の目當違ひなく當
 つて。當つてと。貴賤上下一同に。フシ
 いやくどつとぞ裏めにける。地 然る
 折節いとやことなき上藤を。後達お婢肩
 にかげ埒押開き駆入りて。局と見えしが
 はしたなく。コ、コレく若衆動きやんな。
 的のそれ矢が姫君のお腹に立つてお目が
 眩ふ。地 償やくと呼び猛る鞞固の者ど
 も打笑ひ。地 推参なる言分かな。御神事
 的的先へのさばり出たが不調法。死なば
 死に損構はぬと。地 叱り付くれだじろか
 す。イヤく〜さうは云はせまい。主と
 頼んだ姫君の嫁入り前に乳の下へ。穴あ
 けられて是がまあ堪忍がならうかと。地
 恨むもけにと白羽の矢胸苦しける有様

に。若君馬より下り立つてするくくと走づれば花と櫻とも。水淺黄なる愛護の若し寄り。不慮な事とは云ひながら扱いと指咥へたき氣色なり。先に來りし女を。せはしないやはしたない其處退かほしのお姿と。詞の花の色に香に風が持房達興さめ顔に打守る。中にも局聲を上んせと突放す。イヤヤ小癪なるお上臈て來る懐の。内擦る手は逆鋒の雫雫物のけ。ヲナウそこな大騙。こちの趣向をなわしが男をわしがでどうしよう構や初めぞと。ステテ締めつ姫君は。流せ盗みやる。折角工み拵へて射て落したんな。びろくしやるそなたは誰ぞ。アし初めたる目の内も。戀におほこの若君る寢鳥をば。網掛けうとは大膽なめたアとつくと聞いて置かしやんせ。權大納は何と答も夏黄權の。照葉と顔を打赫めいやらしいとわめけども。こちらも負け言爲道が乙の娘に燭照姫。愛護様とは。氣の毒らしき折節に。是も變らぬ女口。味な事を聞く。趣向似合ひし女夫の中と思し召せ。ムム、そぬ上臈を女房達は肩にかけ。つかくとは似ても違ふとも兎角勝負は早いが勝。あなたが公家の姫なれば自らも右大將。有立寄つて。妾がお主はおの様のお手には。戀の矢疵の時花醫者其許迄は手が廻ら雄が娘に六條姫。氏も系圖も若君の御かゝつてお命も。今を限りになり給ふぬ。杉山宮樂買はしやれとどつと笑へば臺と云うて不足はない。イヤくわしが様子は斯くと白羽の矢。肌くつろけて見右に立つ。姫君少しせき心。君が心は嫁入する。おれが殿御に持つて見しよ。せければ若君呆れ給ひつゝ。神の咎めか知らねども情はこちが一的。あれならぬ。させぬと兩方へ引張り合つた衣二人迄思はぬ憂目見る事と。差入れ給ふあれあそこな幕の内腰元どもを屏風にし手の。もりて浮名は立たば立てこなたへ。左の手押戴いて締付けて。氣遣ひさするて。つい物陰につまこもる矢野の神山匂イ、ヤこちらへと互に募る女の意地。若もお美止なそれ矢と云うたは偽り事。戀ひ初め。見初め寝初めて解け初めて。ち君は持てあぐみ早苗之介は居やらぬか。のそめ羽の色に出て思ひ込んだる一念よつとくと手を引いて誘ひ給へばこち荒木の左衛門くと。呼ばひ給へば兩人の。石に立つ矢の例をば。知られまほしらにも。むつとせられて引戻し戀は互とははつとばかりに走り出で。フ先づ双きばかりにと。縫れかゝるや。左右い先から。了簡すればまんがちな。斯う方へ押分けて。様子はあれにて承る大

殿へ披露して。表向より婚禮の儀式を調へ候べし。先づ御歸り遊ばせと有め賺せば姫達も。流石は人目恥かしくそんなら今日は歸ります。早苗之介殿頼むぞや。愛護様をば厚照が夫に持たして下されや。唯いかにも勝重が肩持つて

願書の巻

の。宣旨の趣き相述べ御宸筆の願文を。若君に差出せばはつと頂戴なされつゝ。社の方に差向ひ拍手再拜懇ろに。高らかにこそ読みあける

け。忌垣はかうやらんけいし。廻廊の拜殿式の文金剛薩埵を移すべし。棟梁の棟をうきやかに。無量の環路結び下け。華蓋の幟は雲を分け。常業我淨の。風吹かば胸の蓮空に開き。蘭麝の匂ひ四方に滿ち。無明の。眠り覚めぬべし。香

添はしましよ。コレ荒木殿構へて六條姫が嫁入るぞや。成程々々左衛門が御取持ちを致すると。當座遁れの請合も空頼めしてこくと。互にめなし男なし廣八丁に何時なると。大浦波立歸り見れども飽かぬ山梨の。花の姿も隠れ行く首尾こそよしと兩人は。若君の御供しあり心へ靜かに立歸る。然る折節。向ふより頭の辨成重卿勅使とあつて入り來り人々に一禮し。流騎馬首尾よく執行ひ神明擁護あるにより。御惱忽ち快然たり。報賽の御爲に神田神領御寄附あり。愛護の若も今日よりは中將に任ずると

が故に上一人より下萬民に至る迄。佛神を深く尊むなり。就中當社松尾明神は帝都不變の守護神たり。豈納受なからんや。然るに天皇圖らずも。寒暑の難に惹きを生じ。醫陰の兩道術盡きて諸佛の悲願空しきを。神明和光の力により。平復ならせ給ふ故。社頭造營仕る。先づ五十餘町に地を引かせ。宮殿樓閣鮮やかに。瑠璃の行桁瑠璃の柱。黄金の圍を延べ開き。瑠璃の高欄やり渡し。碑碣の擬寶珠。磨き立て玉の蓮葉錦の御帳。渚の砂に黄金を交ぜ壁には七寶。池には玉の橋をか

の煙諾經の聲。二六時中に絶間なく。綾の幣帛白銀の獅子狛犬。階は唐木を以つて作らすべし。大塔鐘樓堂いかにも高く。雲の上に光を放つて作らせ四季の祭禮怠らす。珊瑚琥珀を延べ。九品の鳥居石の塔。金剛界の曼陀羅。胎藏界の曼陀羅。鍔腹卷太刀刀。唐土天然我朝。三國の寶の数。寶殿に納むべし。仰も神と申すは眞俗たるを姿とし。正直たるを心とす和光。同慶。曇りなく異賊を千里に。退け早く素懷を遂けしめ給へ。南無歸命頂禮。敬つて申す寶龜三年五月十五日。二條の中將愛護の若と。高らかに讀み納め悦び。

勇み歸るゝ、神道兩部。習合の道の道たる奥旨をば。見る人聞か人押並べて感ぜぬ者こそなかりけれ。

第二

兩雄必ず争ふと先哲を評論せり。右大將有雄卿禁裡に於て争論の。更に晴れやらす家臣駿河の前司國則。其外一家の諸侍膝元近く招寄せ。御惱につき典藥は醫術を盡し。諸寺の名徳家々の秘密を以つて加持するに。更に驗のなき所を比叡山の阿闍梨めが。作り驚夢の滅多的まぐり當りに玉體は。忽ち平安なりし故二條の家は日を追うて。威を一天に輝かし我が六條家は年々に衰へ行くは知れた事。無念と云ふも餘りあり。取分け先帝第一の御子某が妹腹。村雲の皇子こそ天下を保たせ給ふべきを。行跡悪しとさみしつゝ。二の御子。春宮に立つる由は清平めが業ならずや。彼といひ是といひ最早堪忍なり難し。天下の諸武士を相語らひ左大臣を打滅ほし。當今春宮追ひおろし一の王子を位にそなへ。某攝政。關白と尊まれんと思ひ立ち。當時諸國の大名には先づ何れを頼むべき。面々所存を殘すなど大きにせて怒るれば。あり合ふ者ども口を揃へて。目出度き御企て。御家の繁榮此時と。悦び合ふこそ愚かなれ。國則一人最前より眉を蹙め居たりしが。くつゝと笑ひ出し。扱も扱も輕々しく淺はかなりしお心や。大事を思し立つならば天下の大名小名が日頃の行作に心を付け。彼奴は不忠に與せぬ者彼は味方につく者と。とつくと心底見届けて仰合せはされ候はど。事も成就致すべき諸武士の所存も辨へず。只軍勢の多少のみ。選ばせ給ひうかくと。逆文を待ちかねば。遂には此事露顯し叛逆の名を取つて。お家の滅亡近きにあり總じて軍の肝要は。居ながら遠きを鑑みて戰はずして勝利を得る。是良將の成す所。此度の御大事憚りながら國則めにお任せ候べし。究竟の智略あり。此左大臣清平公。北の方死去の後まだ縁組の沙汰もなし。扱もお家の姫君様愛護の若の御器量に。首だけのほつておはします。そこをば態と引連へ清平殿を壁に取り。お奥を入れられ候はど。外に色ある御身とひひ。年寄り男を嫌ふといひ新枕からそぶそぶと。睦まじからぬ夫婦合そこを見付けて姫君を。瞞し騙して人知れず。雙も鞍も奪取らん。元來天子御預りのお賣なれば早速に。御咎めあらんは必定なり。其時節には姫君も此方へ取戻し。逆臣なりと譏奏せば仕合せよつて遠嶋か。大方お首はないものよ。然る時には天が只取る山の時鳥。繁松山御家の。繁昌ならんと申しける。右大將冠を

振り。汝が智謀の一通り道理無きにはあ 謀帝も 杯清平も。一杯喰はず喰はずと
らねども。不相應なる縁組を吞込む様 孫など見せてくれるなど笑ひて。御
うつけでなし。何故かゝる工どと咎めら 殿に 三へあがりけるヲ勅なれば。曆も
れては毛を吹いて。疵を求むる道理ぞと。 入らず相性も。老も厭はず年若な妻迎へ
云はせも果てず差寄つて。それ猶易き謀。 舟海に。一家一門上下を清平公の御館は。
清平公と殿様と互の威勢争ひは。遂には 石を打つやら諺ふやらヲシざりめき渡る
國の亂れごと天子も兼ねて是のみに宸禁 ぞ賑はしき。 愛護の若も親と子の祝
を御惱まし候由。前非を悔いて今日より 儀の衣裳改めて。やうく御前に出で給
意趣を含まぬ誓約に。宣旨を請うて清平 ぶ。荒木の左衛門近國若君のお傍に寄り。
を俾に取り度く候と。 奏聞あらば忽 君。先御臺様御同意に御奉行ましますと。
ちに勅詔下るは知れた事。何程心に落ち 申す内にも涙ぐみ。哀れ變れる世の中
ずとも否とはよもや申さじと。ヲ手に 申す内にも涙ぐみ。哀れ變れる世の中
取る様に言ひければ。 跡先知らぬ智 と。 差俯いてぞ居たりける。 乳
慧ななども是ぞ誠上品の。上智と云う 人は纏て心得て御土器をば持ちければ。
たものならん扱申されたり申したり。文 御末の女房鉢子取り 御酌にへ立つ
殊様よと囁すにぞ附いて乗つたる右大 君は。物思はしき風情にて。物憂き我が
將。ヲ、尤もぢや吞込んだ。直ぐに只今 君は。物思はしき風情にて。物憂き我が
奏聞せん善は急げちや今日中に。姫は送 身の上や母といふ名は變らねど。生さぬ
らん興乗物介添字領塗長物。嫁入は親の 仲には昔よりさがなき例あるものを。恨
めしの父上や元の母様戀しやと。受持ち 給ふ御盃干しも得やらでしをくと。心
迄来る憂き涙止め兼ねさせ給ひける。 六條姫は戀草の枯るゝとなしに逢ふ事
を。いつかくと松の尾の。神の咎めか 梓弓。引違へたる嫁入も心の駒は變らぬ
と心誓文を。立てゝ語つて知らせてと。 中を。左衛門ハツト氣が付いて眞中へ
人目の關の輕さけにうろくとした目の かつと出で。サア若君様お邊をば早う
御戻しなされませ。此お盃濟むとはやあ なたは母御お前はお子。どう判がしても

んで下に置き。悪しい事あら幾重にもくくと念佛唱へテ敬まひける。清平
お叱りあつて給はれと。地こちらはほん御機嫌麗しく。早苗之介は常の事久々に
の母様氣。姫の心は妹背の中に巡れる御て對面し。満足なりと宣へば。左衛門耳
土器。是二世迄の約束と心一つに樂しみ口を寄せ。コレ大儀によくこそ多つ
て。笑の内なる劍羽や鴛鴦の衾も敷き忍た。拙者へ仰せ渡された。ヤアく。
奥の間深く入り給へば。若君御禮を鯛を振舞へとこなたに仰せ渡されたか。
さまりてオウ御館にへ歸らせ給ひけりヲ、食べませうく。七十三になります
フシがる折節。老の白髪もすべらが鯛の頭もやりますと。ヲ取つてもつ
かし祝儀に持てる島臺の。姥より年は高かぬ挨拶なり。清平重ねて宜ふ様
砂のおのれと屈む腰付も。慇懃めいてのレヤ左衛門。舞が祝儀の嶋臺は松を赤葉
しくと。清平公の御前に献上物を差置に染めなして。鶴かと思れば鳩を置き尉
いて。ささてくく御目出度や。の代りに冠を乗せ。姥にはあらで振袖の
さぞお嬉しう思し召そ。折節倅早苗之介。女が麻笥に打凭れ。鬘斗の如くに信
此頃痞がおこりまし。飯汁もろくに食べ濃麻を束ねて臺に据ゑたるは。所存こそ
ぬ故婆様苦勞にあろけれど。名代に往て有りつんヲ尋ねて見よと宣へば。左
下されと頼むを厭とも申されず。舞にな衝門きよつとしたりしが。さあらぬ體に
つて廿年闕より外へぬ婆が。只今爰へ打笑ひ。取所なきかな舞に尋ねる迄
來ればこそ御無事様なる御顔を見て。早苗之介が物好をつくく察
冥途の土産に致します。ア、南無阿彌陀し候に。常磐の色は古めきて。赤松つた
染めて止むべき色かはと。ヲ詞の端の

うるさくに。左衛門そつと後から。太股またまたぐれば清平公御氣色大きに損ぜられ。を組みてスエラいん暇の盃汲み交し。をコレ
 抓ればアイタシコ。こりや年寄りに濡短座極の男めか某五十に追つか。母者人此脇差を突立て。左へ廻すを合
 れるのか。但し云ふなと止めるのか。要り。色に迷うて勅諭を有難いとも嬉しい。岡にて首打つて給はれと。仕方で見す
 にいきすち張らせずと御家老役に先達つとも。思うてうか／＼暮さうか。國家のれば二三度も。領くばかりを答にて。云
 て。なぜ御意見はさつしやれぬ。いとし大事身の大事深き思案のある事を。辨へはす語らすわるびれず。聲もいつそ
 やこちの嫁御寮になんの落度もなければどなしの諛言だて。聲が聲の高ければ部屋取得なり。勝るかゝる所へ荒木の左衛門
 も。血腰の抜けたこなたをば兄に持つたにも聞かん附隨が。里へ歸りて告げたら近國。駿河の前司國則大勢を引具して。
 が因果にて。早苗之介は去つたぞや。ば忽ち事の破れなり。不便には思へど門荒らかに打叩く。勝重上より聲をか
 それでも合點が行きませぬか。不吉の見も右大將への言譯に。早苗之介め勘當すけ。ヲ、早苗之介是にゐる。問ふ迄もな
 えた御祝言凶會日なり申の日なり。お興る明日中に親子共。屋敷の内を追出せく切腹の御使者なりと推量した。左衛門
 の入つたも申の時。去るといふには手かと常は溫和の清平公。フ、以ての外の御一人來られても早速事の濟むことを。い
 付かぬ今宵の内に去らしやれと。老の唇機嫌なり。荒木は呆れ聲さへ何聞いてつぞや禁裡で出會せた變化仲間の勅侍。
 そり立て、フ、齒に衣着せず云ひ散ら。やらきよろ／＼と。鰻卵に地黄丸。お物。檢使などと云ふ事が穢らしい汝等
 介が女房を。去つたと云ふは實正か。歸りけり。忠臣の種は心に蒔きながら。に。武士の切腹見すべきか罷り歸れと睨
 左衛門ハツト畏り。さん候此夕仔細もい植付けならぬ早苗之介空五月雨の時なら宿なしの素浪人。佇む所のなきまゝに自
 はす妹めを。去つて戻し候へども。御婚ぬ。勘氣を受けて追立ての使三度に及べ業自滅の切腹を。檢使とあつて來りしは
 禮に取交せて不吉なる儀を御耳へ。入れども。門戸を締めて追返し。討つて來らおのれが末期の面目なり。四の五の云
 申す儀を憚りて隠密致し候と。申申し上ば深う親子一所に死覺悟。小高き所に座うて隙取れば踏付けて首打つが。どうぢ

や／＼と責め付ける。勝重かつ／＼と
も大切に稍暫し案ずるを。下手が側から
笑ひ。夏豆腐の食らはれぬ六條殿の御
もとかしがり助言を云ふは差當る。善惡
家來。國則とやら青のりとやらとろ／＼な
ばかりに目が付いて一番の碁の勝負
事を置いてくれ。歸れといふにへちまう
は。地上手に及ばん如くにて理非明ら
て去ねば例の雁股と。弓と矢取つて
かな御主人の。遠い所を鑑みてなさるゝ
打番へば。アレ死狂ひのあはれ者。門蹴
事は其方や。某などが眼にはなか／＼以
破つて討取れと侍どもに下知するを。左
つて及びなし。六條殿への言譯とてお主
衛門暫しと押留め。やあら聞えぬ前司
を勘當なさるゝも。御所存あつての事な
ぬ内。貴殿に先の越されては拙者が分は
らん。主人にすねるは身の誤り奥山家へ
どこで立つ。貴殿の切つて立てうか
と。言ひ宥むれど頭を振り。イヤ早苗
に立寄れば。國則聲を荒らけて。イヤ
と。刀の柄に手をかくればア、御免誤つ
之介が一命は諫めを入れし鳥臺に。差出
た。二條殿の御家來は。どれとも御氣が
して置きたれば蟬の蛻の此身體。どんな
短いとフシ輕薄云うて押退る。左衛門は
薬を用ひても本復はなり難い。疊の土で
聲を上げ早苗之介も見苦しい。此場に
舟を漕ぎ穴藏で。雷開く。用心深く養
至つてさしてなき相手取るは何事ぞ。お
生も全うなさるゝ御自分は。武内大臣
主が持病の短氣をば一言の妙薬で。一療
の年になる迄長生きして。二條の家は野
治して見よう。心を鎮めてよく聞け。
原となり。鹿の臥所となるを見て袖紋ら
例へば上手が碁を打つに。一手をおろす
ゝ有様を。伍子胥が忠義の眼を借り見
ても。掬り殺すが合點か。ア、待つた

待つた。或程こなたの大力は先達つて承ござつたか。老を養ふ孝行の何かの禮も冥途の旅の御餼御主人よりも拜領した。云はすして。地死ぬるが心に懸かつたに。地浮世の妄執晴れ切つたり。お暇申す笑止なれ。地色ヲ、ちつと左様でござんようこそは来て下さつた。嫁御くんと手といふよりはや腹を切らんとする所を。しよと。軒端に鉄を打掛けて。門の上に這を上ぐれば。常世も兩手を差下し。互に左衛門背つて。ヤア死なれぬく早苗之ひ上るを。勝重見るよりコリヤく女め。手を取り撫で擦りお前は嫁と宣へども。介。此度の御褒美に國と知行を大分に。某いかになるとまゝ跡に残りて若君わしは義理故母様とも姑御とも得云はず。拜領しながら死なうとは。ムウ何と云ふの。御先途を見立てよと頼んだ一言はやに。跡に残るか悲しやと。恨み。叩つ左衛門。鉄一挺に錠と笠外に何にも拜領忘れて。去られた男の門内へ入らんとあご道理なる。地岩木にあらぬ早苗之介せぬ。ハア愚かなりく。國も知行も日かくは推参なり。地おのれ其需一寸で。共涙にくれけるが。地稍あつてコリ本もひん丸めたる竹の子笠。地錠打ちも。おろすと否や切折ると。太刀の鏑元ヤ常世。我君よりの御使とは何事なり。かぶり行く時は山河草木悉く。望み次第抜きかれば。常世はわつと泣き出し。と尋ねれば。誠に歎きに取紛ればたと忘に汝が物。水に望んで魚を釣り春の山田餘りと云へばむごたらしい。其言分はどれて居りました。清平公の仰せには。勘を掘返す。鉄一挺に萬石の知行は年々身うぞいの。尤も暇は取つたれども今はの當をせし者どもが知るべと云ふはそちばかり跡見苦しうなき様に。地取賄へと。勝重横手を丁ど打ち。最前食べたお薬の義理も人目も恥辱をも。打忘れたが誤り。宣ひて。身體を隠す錠と笠あたりを清む。臉が只今顯れた。清平公より改めて知行か。是が身も世もあらりよかと口説き。れ御覽せと差出せば。勝重ハツト押戴。知られた年貢米。實るを待つて早苗之。立てよぞ泣き叫ぶ。地聲や心を通ひひき。お主の慈悲は未々迄。斯く有難き介。名をも形も隠家に土百姓の助三郎。ん老母は顔を振上げて。ヤレナウ嫁御ものなるよな。コレ御覽あれ左衛門殿。大小入らぬと投げ捨つれば。常世は門よ

り飛んでおり、オカリ錠取りへ着せて笠の緒も、縮めて寝る夜は、なけれどとも死別れより生別れ。巡り逢ふ日を楽しみに暇の状が氣に懸かる。爰でさらりと引裂いて。もうこちの人往かしやるか。ムム、女房ども無事で居よ。兎角命が芋種ぢや。地纏て戻つて子種をば賤いてやらうと差合も。聞かぬ老母の手を引いて門戸くわらりと押開けば。國則向ふに立塞がり。やあ待て、どこへ行く。いつぞやと云ひ今と云ひよくも矢先を向けしよな。堪忍ならぬ太刀先で勝負をせよと極付くる。勝重につこと打笑ひ。土民に下つた某と見侮つての言分な。面白い面白い。地在所喧嘩の手習ひに小鍛冶が打つた鉞がまち。いざ参らうと振上ぐれば詞には似ず飛退り。こちが習うた兵法し。鉞と斬合ひ不得手なと。云ふをば機会に指して行く。道は一筋善惡の二つ

の中を踏分ける。荒木が智慧は吳子孫子。節義は專諸田横にちつとも負けぬ勝重が。心に望みある時は短氣起すな端喧嘩すな。韓信が股女房の股。抜けて潜つて逢坂の關の。そなたへ差して行く心は古今類ひなき。夫も粹兄貴も粹。女房は粹の骨頂と聞く者。感じ合ひにけり

第三

遊女の袖吹き返す飛鳥風。誰が徒らに産みつけし。情の知るべ手を入れて。水の月取る場照姫。女の意地の強弓に。スエチ羅綾の下着錦緞の。打掛小袖しどけなく馴れぬ徒路の介錯に。お婢局壺裝束。奴に振らす長刀の鞘の中山命とは。それも戀路かいとしか愛護の若の御館を。前渡りしてあちこちとオカリ合圖のへ言葉咳拂ひ。風が知らせて。おとづれて。裏門そらりと押開き。内より

常世走り出て待兼ねて居りましたに。よろこそ御出で遊ばした扱まあ今宵の御日待。いつくよりも賑はしくお座敷から勝手迄。藝者どもが居流れて御隠し申す所がない。斯うあらうかと思つた故。御長櫃をお持たせと言ひ遣はしたは爰の事。あの中へ忍ばせまし藝者の衣裳と思ふなら。誰が見咎めも致すまいよい首尾を見てすつと出し。本望を遂げさしよしよ。御窮屈なは暫しの内如何あらんと伺へば。姫君は打笑みて戀さへ叶ふ事ならば。何の苦勞な事あらと恥かしさうに顔隠し。姿も隠す長櫃のふためき渡り押入れて。御供の内待鬚のない奴殿これ界かつしやれ。お局方はお歸りと戀のすれ者手引して。契りの末は長持を、館のへ内へ昇き入るゝ日待は公家も。町方も。同じ格なるは遊び。琵琶琴止めて三味線も胡弓に移り尺八の。戀慕流しに氣が

減入りや。又引立てる流行歌節音曲は外に洩れてへ面白きッシ既に更け行く。家にをりまする。遠。今からお目をかけ値なし三井の貸と答へて待どもばらくと駈寄るを。常

に高提灯燦爛としてお館の。廻り四五町にうまくと其日暮しの歌念佛。藝者のこを聞かしてやれ。御臺腹立て聲を上げ。

取囲み清平御臺に引添うて。荒木の左衛門駈來り門外にて大音上げ。御寶藏を切抜いて若君様へ御預けの。御鞍御太刀

を盗み取る徒者の御詮議に。大殿は迄御出でなり若君の御館へ。日待に召され

し藝者ども罷り出て面々が。身の言ひ晴れを仕れ出よくと呼ばはれば。打驚

いて愛護の若常世も出て共吟味。日待のハ、いかさま咄に聞いた奴御詮議の筋

興も覺果めて三味線胡弓打折られ。わにより重ねて呼出す事もある。今晚は歸

めく聲又詫びる聲。燭臺こけて猪口皿はれく。アイくお暇申します。日待

オナリ我も。我もとッシ走り出て。座頭は相違なく頼みますると逃げ

はぐれし座頭の坊滅多無性の家鴨飛び。て行く。サアはばつかりか門内に何物

殿を後に畏る。こりやくこちら向きも残りぬかと。聲に従ひ黒漆の長櫃一

ませい。シテ名は何といふ何慮の者。ハ合昇き出す。六條姫は見るよりもそれ訝

アお差合ひかは知らねども夜盡なしの城しい立寄りて。蓋を開けと宜へば。はつ

それでわしが立ちませぬ。立たずとお

れを立てゝたも。ハテわしから立てゝ下
 さんせ。ヲ、そんならば立てゝやる。蓋
 あけさすまい開かずまい。其代りには
 自らが詮議止めやんな悔むなと。側なる
 鐘を追回り伸べ長持突かんとし給ふを。
 常世はやがて取継り。奥様何を遊ばす
 ぞ。常世とぼけた顔すまい。櫃の内なは
 鳩照姫。ヤア大切な儀を宣ふが。何ぞ證
 據がござんすか。證據は即ち此鐘先。
 突かんとするを突かせじと取付き突退け
 競合うて、既に危く見えければ。左衛
 門はつつと出で。懼りながら拙者めに
 御詮議御預け遊ばしませ。ム、何と言や
 る左衛門必す兄妹なればとて。最辰があ
 れば許さぬぞや。成程某あり様に云はせ
 て御目かけませう。コリヤ妹。盗んだ
 なく。兄様それは何言はしやる。ヤア
 諍ふまい。御家の重寶太刀御鞍おの
 れが盗んで此櫃へ。入れ置いたに紛れが
 ない。眞直ぐに白状せい。ナウ左衛門殿。
 人にこそよれ左様なる悪名を付けられて
 は早苗之介が身分迄異なるものになりま
 す。違つて無體を仰つしやれば。兄とは
 云はさぬ許さぬぞや。はれやれおのれは
 狼狽者。女なれども是程の了簡は早つく
 筈ぢや。大殿様や左衛門が詮議は盜賊一
 通り。御臺所の御吟味は筋が違つて紛ら
 しい。大切な儀が重なる程若君様
 の難儀といひ。他門へ歎きをかける事そ
 こをつくと合點して。おのれが盗んだ
 鞍太刀が箱にあらうとあるまいと。盜賊
 の詮議さへ濟めば此場が無事に濟む。盜
 みましたと名乗つて出て若君様の御爲
 に。死ぬる命は夫のため早苗之助が聞い
 たりとも。憎い奴とは思ふまい。嬉し
 ば。御臺所は走り寄りなう情なや胸慾や。
 清平公もすつと立ち家來が腰の捕繩
 を。御自身持つて若君を縛めんとし給へ
 ば。御臺所は走り寄りなう情なや胸慾や。
 許させ給へと取付いて歎き給ふを突放
 し。間もない親子の仲でさへ左程に可
 愛う思ふもの。誠の父が不便さは胸
 も五體も裂くれども。富仕へする悲しさ
 は。第一は先づ天下の爲。第二番には
 先祖の爲。第三番には不義者と。他人他
 門に笑はせぬ。慈悲が餘つてかける
 門に笑はせぬ。涙ながらに縛め

の。フ繩も血筋に染めぬべし。サアき縛めの。蜘蛛手にかゝる玉の緒も絶え侍ども此若を部屋の柱に釣上げけい。側にはは人は叶はぬぞ禁裡の宿直相勤め。立歸の。迷ひ給はん悲しやと。降る甲斐もなつて詮議せん近國當世を明日迄。其方にき松が根をフ波に現はす涙なり。預くるぞ連歸つて吟味せい。幸ひながら夜衣わが夫ならぬ夫さへも。宿直の留守左衛門よ。愛護の若も妹も櫃の中なる御と一人寝の。蚊帳の内は籠の鳥。下焦れ寶も。三方百尾のよい様に。どうぞ思案なる泣き寝入り。夜着の下より一念の。魂はつと燃え出でて空行く星かへ天の河をくゝと跡は。涙ぞヘ知らせなる。渡しも果てぬ。鵲の走るともなく庭も草葉の外に袖袂。かゝる浮名に愛護の若。せの。落つると見えしが忽ちに御臺の姿身に覚えなき唐鞍や。スエテ刃の太刀を失すつくと立ち。世に嬉しけに若君のお傍ひし。科を負ふてふ杉柱。オシ父のつらへ走り寄り給ふ。時に不思議や是も亦同目に繩。解いてほどいて打解けて語り盡さに猶忍ぶ。過ぎ行き給ふ母上の。此世じ闇路の長櫃より。一つの魂飛び出でくさん膝言に。スエテ嬉し涙も紅の。目の我を壁にせて引寄せて。スエテ撫でられけるが。姿を假のの鴛照姫立並んだら顔と中瞋つて聲震ひそれなる女。フシ歸れともしも何時しかに。今咲く花に色見えで。顔。互にに突退け押隔て睨み合ひ又怒り合そ。浮鼻の露の鴛照姫。妬ましの詞は親一人子一人と。言うて語つて慰むましの心やなう。互に練定めて天持ちて。思ひに夜もすがら。戀しき人は水の江のに。いかなる事のあればとて斯くまで強伏屋に生ふる簞木の。其名をいかにせん其浦島が箱ならで。あけて悔しき自らに

憂目見せんと計ひし。憎やさかなやはし
 たなや。いでく恨みを晴らさんと鬢を
 取ればこなたも取つて結ばほれたる糸
 薄。亂れく〜てゆらく〜。ゆられく〜
 て突放され左右へかつばと伏轉じ。コハッ
 又起上つて追懸け。追懸け追詰められて
 追返し。胸と胸とに富士と駿河の煙くら
 べや。思ひ較ぶる女の一念。負けじ。劣ら
 じいとし可愛の俤は。ナホス地 あれく〜あ
 るに嬉しやとて。走り爪立て立ちかゝ
 る。此縛めは結ぶの神の御注連繩。喰ひ
 切り引切り抱き下して背中を擦り。手足
 を撫でたり花の姿をつれく〜守れば。罪
 も報ひも嫉妬も仇も。忘れ果て〜面白や。
 カハリニリ登文 辛苦しやるか顔の痩せ。初手
 の情氣は。どこへやら。今は二人が理に
 落ちて 合口し〜ヨラシ〜チヨウ〜
 り外はなし。待てば甘露の日傘差しか
 けし。身もいつしかにオウリ沈み。果てに
 殿縛め給ひしを誰が許して其上に。御
 身の上も。君故ならば、臺所の寝間前に行み給ふは訝しと。問詰
 し。ヨシイコ。ナホスシ 憎からじつまし隠らば唐土の。吉野の山
 の。山のとろくの又其奥へも。附添ひ引
 添ひ離ればやらじと兩手を取つて。我こ
 そ行かん。イヤ〜此身と彼方へ此方へ
 引合ひ捻合ひ。力車のくるく〜。く
 るり〜と入り違へ。いづれ千引の石の
 身と。動く氣色も難ければ。姉妹背の仲
 は今宵には。限らぬものと寢に歸るコハッ
 何時迄草のいつまでも。嫉妬は恨み盡く
 されじ。忘るな忘れじ二世に。三世と闇
 夜の雨の。形見に通ふ朝の雲。消えても
 残る濡衣の恨みも二つ三つ五つ。七つの
 鐘に夢覺めて。ナホス地 さらばの聲や松の
 風。佛消えて愛護の若忙然として。言へ
 おはします。フシかゝる所に。常世は兄
 の計ひにて細目許され駈來り。若君を見
 がらも恥かしきとても叶はぬ戀路ぞと。
 るよりもなう嬉しやなさりながら。大
 今は心に諦めて。ふつく〜思ひフシ切り
 殿縛め給ひしを誰が許して其上に。御
 しぞや。愛護の若を落したも。只管

頼むと合はず手中に情やッシ籠るらん。常世は膝を立て直し。嬉しい事を宣ふが御眞實にて候か。神々かけて嘘はな。地ハア有難い忝ないお禮はゆるく申さんと。若君の手を取つて比叡の山におはします。阿闍梨の御坊は現在の伯父上様にまします。あれへお渡り遊ばしませ早やとくくと言ひければ。愛護の若は聞し召し母上様や其方が。志は嬉しいが。親の不興を受けし身の縦へいづくへ行きたりとも。年端も行かでの様な大きな科を致せしと。稚兒法師等に笑はれば生きたる甲斐もあるまじき。元の如くに纏めて父のお心休めうと。スエテ思ひ入つたる有様に。常世はわざと荒らかに。脚そりや曲がない若君様。左衛門や私が命にかけての忠義をば。お前は水になさるゝかと。御臺も共に諫むれば若君泣くく立上り。然らば仰せに任さんと

踏みも習はぬ一人旅。常世跡から來てたもう。父上お叱りあるならば。母様よきとばかりにてオカリ館をへ紛れ出で給ふ。跡見送りて。諸聲に。泣く音を立てゝゐる内に。思ひがけなき清平公御太刀を提けて庭上へ。つかくくと出で給ひ。ヤア何故に兩人は爰にゐるとの御詞に。狼狼へ感ひうちとかう答もなかりしが。御臺心を落し付け。斯く顯はるゝ上からはとても通れぬ身の過り。愛護の若は自らが館を落し候と。フシをくとして宜へば。常世はずつと差出で。いえく左にては候はず。御家の寶を盗んだも私一つの心にて。御存知もなき若君に愛目見するが悲しさに。兄が手前を抜けて斯くは計ひ候と。死ぬるを先に立てゝゐる物言ひさへも。死殿様。何科あつて自らに惨い死目を見涼しけれ。ム、其苦く。汝が盗んだを三日が内。取殺さずに置かうかと。泣き叫びたる其聲はッシ恐しく。また哀れ

が手へ渡し館へ歸る其砌。持參致せと言ひ渡せコレヤレ長櫃持つて行けど。餘り嬉しき御上意に。答もやらす百千度打領いて會釋して。女の入らぬ力損今といふ今間に合ふと。櫃輕々と引提けて走出るを後より。御臺所はしつかと取り。是は自ら預らう。これ奥様。それでは前立て給ふ誓文が無になります。ヲ、神の罰恐うない。我戀叶はぬのみならず。鶏照姫にのめくと。二世の下紐解かせてはどうも生きてはゐられぬ義理。どなたの御意でも此櫃は。爰を出さじと取

なり。地 清平涙をはら／＼と流し。地 尤の爲に清平が心一つに様々と。思案工夫 世の縁は薄くとも。徒名とこなの立たぬ未來にもなり理ことわりよ。今言ひ聞かす一通り。篤篤くくをする内によしない寶の詮議だて。地 太は長き妹背を契るべし。さは云ひながらと心に得心あれ。お主が親の右大将悪心 刀鞍紛失致せしと世間へ沙汰を致さす 是非もなき。惨い最期を見る事と。ヌエテし陶に害がりて。娘の不便も打忘れ世に不 誠は某盗み出し天子の御藏に納めたり。やくり上げてぞ。泣き給ふ。地 姫は苦し都合なる懸望は。二條家の寶をば奪取ら 誠は某盗み出し天子の御藏に納めたり。き聲を上げ。あゝさて嬉しのお詞や。つんの謀計。逆意の程を奏聞して打滅すは 愛護に越度はなければども手段を人に知ゆかゝるべきお心と。知らでやみ／＼朽易けれども。仇を仇にて返すれば子々孫 させぬため。預り主の科を著せ縛り搦果つる。フ身の上こそ是非なければ。孫迄仇になる。地 駟れ親しむを幸ひに意 母といふ名も消えて行き。互に他人と他夜の夢の心地ぞと。聞き習ひたる事なが見の加へ善心に。立返らせん所存にて勅 子の縁切れたり。そなたを里へ戻すればれても。何かはつらく思ふべき飽かぬ別答申せし夫婦の縁。地 嫁入つて来る其方 母といふ名も消えて行き。互に他人と他夜をすれば。縦へ千年を過ぐすとも一は帯をも解かずまどろませ。身を堅めた 人との。内に契りも交せかし。地 跡をも 慕ひ行けかしと工みし事も徒らよ。此長らせめて一日片時も。此世で妻よ夫よる心底と。親子歪交はず時物思はしき有 櫃の太刀鞍には耳もあり又口もある。母 といひ語らはゞ斯く迄に。人戀しとは思に思ひ寄せ。清平はよく知つてゐる。 といひ子といふ名を削らぬ内に見苦し ふまじ何を云うても悔みても。詮方波のいとしや悪い親持つて成るべき縁を引裂 き。立ち振舞ひを致せしは二條家も六條 立騒ぎ今死んで行く自らに。恨み妬みもかれ。地 女心の一筋に懸煩うて死なずん も。末代迄の疵になる。今死ぬるのは親 ないものを鳩照様はいづくにぞ。愛護様ば。淵川に身を投ぐるであろ。地 命一つ への孝。夫への心中ぞや恨んでくるゝな の御事を。よく／＼頼んで死にたいに。を助けるは廣大無邊の慈悲といひ。堂の 六條姫。地 清平は暇をやる。そちが夫は 逢はせてたべや人々とフ。さめ／＼。泣 瑠璃るりの珠。碎くより猶残念さに。地 そなた 愛護の若。地 夫婦は二世と云ふなれば此 いて撮口説く。地 ヲ、よい合點／＼。姿

婆と其途に二人嫁。清平も亦對面せん。行末さへも。ゆかしけれ。若君のと自ら寄つて長櫃の。蓋取り給へば姫君。御行末尋ね渡らせ給ひなば。清平公のは。關を出でたる弓張の。眉泣き眠らし襟。お許して六條姫は未來にて。必ず女夫に。先も涙の常世諸共。六條姫の御側へする。答と云うて語つて證據には。お前る。と走り寄り。なういとほしの有が立つて給はれや。此世はこなたへ貸し様や。同じ戀路に踏迷ひ我やはずらき。置く事は是はづかり。あら堪へ難や苦し人や憂き。思ひもわかで命さへ今消えて。置く事にははづかり。あらかんやと。悶える中に残し置く。口ずさみに行く人ぞとも。知られず知らぬ中々に共。やかくばかり後の世の。頼みになして戀にすけなうはしたなう。言ひ散らしたる。死なん。生きて待つべき契りならねば。恥かしや。自らとても下紐の關を越えね。南無阿彌陀佛とばかりにて。秋に先立つば定めたる。夫といふ名も知れねども。朝顔の消えてはかなくなり給ふ。なとて共に消え入り。給ひけり。六條に人界の有様は。かけろふ稻妻水の月。

條姫は玉の緒の切れ行く氣息をほつと繼消えての後は親もなく子もなく妻も假りき。暫しは顔を打守り。深しきは鴛照の名に。假りの契りを頼みにて鴛照姫は姫。世に恨めしきは我身の上。夫といふ。若君の。御跡慕ひ出で給ふ常世も共に夫名は變らねど遠き未來で待つよりは。近の顔。見まくほしさに旅衣。あはたつ山。き此世に千代や千世契り重ねて嬰兒産んの哀れとは。死んで行く身と止まりて。子で。松に小松に相老の諸白髪迄添ひ給ふ。を思ひたる老鶴と思ひ較べて見較べて。

亡き魂は西の空焦るゝ我は東向く。跡に一人すつくりと名殘惜しげに手を上げてさらば。さらばの聲々に。落つる涙は百千行。ばらばら鳥の鳴かぬ間に別れ。別れに立出る。

第四 愛護の若道行

高麗錦。フシたち馴らしたる。子心に。世は憂きものと白河の。はしたなき目に愛護の若今朝立出る旅衣。フシナリ迷ひへ出でさせ。フシ給ひける。昨日は玉樓金殿に。冠の紐を結びしが。スエテ今日は行路の旅草鞋。蹴上の水に影映す。ナリ姿の。花は散り行けど色がありとや蝶々の。裾に纏れて戯れて。肩に宿りてひらひら。ひらりと拂ふ其先へ又飛ぶ翹のちらら。と。關の東を教へ行く。あゝかはゆめし。フシほらしや。汝さへ旅の。道連れと。思へど物は岩陰に。委隠すも慕はしく梢々を見やる。棟のものに。す

つくりと。一人立つたる六條姫。我待ち顔に立寄れば。はつとばかりに驚きて。いつしかに。人いや洩れんわれが身の志

へ寄り。纏るし袖を振放し。左へ走り右へ逃げ。覺えず帯のしやらどけを。わしが結ぶと走り寄り引繕うて腰元を。とん

と叩いて戴いて。三下り歌。若葉様には。黒い勝重が貧を養ふ物とは。拜領の歛宿月

が似合うたえ。染めてさへ。染めてお召しやれく。ろ茶染え。染めてさへ。染めてお召しやれく。ろ茶染え。ナホス櫻が。フ

枝に梅薫る。持合ふせたる女夫連。あざに外面へ出でて林なる。晝の桃摘つ親

度三度四の宮河原十禰寺。ホッシ古蹟と。の閣梯子入らずに割鉄。梢に棹は届かね

聞けば恥かしく。浮名や爰にとどめんと。ど屈みて伸びぬ老の腰。そこよフシこよ

跡へさがりて。道草の。四片八仙花をとする所に。地百姓ども駈来り。的證見付

るふりも。母をまくとや忍冬。花見る振けた老耄め。母汝ら親子程横着者は

りで待合はせ。オクリ先立ちへ行けば追着き又とない。行先もなき浪人ととこぼえた

て道守る神に。手向けする男思ひの誓ひるが不便さに。地下に足をば泊めさせても

には。逢坂山と繰返す若君は又いつくへ慈悲を垂るればすりかはく。麥秋には首

刈りする稻の穂を抜く夜綿をとる。どことも鼻盗人は其座で埋むが法なれど。三

井寺の領分だけほど足打が有免ちや。祖母めも今日より同罪と。足手を取つて

引張れば。早苗之介はア、コレ待つて下されませ。段々の御腹立ち尤も至極さ

りながら。老母が桃を騙れしは。某斯様の有様を堪へ難かると問はれし故。母に苦

勞をかけまい爲いやくさうは存ぜぬが。坐つてばかりある故に太股に實が

入つて。よだるう御座ると答へしを。御存じのかな型なま中の儀を聞きはつり。ム

ム桃に實が入り喰ひ度いとや。得たと駈出て斯様な粗忽を致されしも。

某が詞の科打ちも叩きも遊ばされ。科なき母は御赦しと。フシ手を摩り詫ぶるぞ道

理なり。親に孝ある一言は田夫の身に聞き入れて。然らば婆やめは赦してや

らおのれが科は今日より。桃盗人の制法

に過怠も桃栗三年ぢや。柿なら八年かゝつて自らを又候愛目見するかと。紅亂す顔色は。地獄を巡る目連の母を。らうに仕合せ者めと聲々にわめき。散らつかと走り出で側なる棹を追取つて。殿ヲ見付けし如くなり。老母は何の辨へして。ヘ歸りけり。フ御痛はしや。若り情もなう悲しやと若君は。あなたこななく。猶振上げて打つ杖に。フ泣く音や君は。習はぬ旅の物憂きに。どとは覺知たへ逃けさまよひ。旅に疲れし者なるに。空に歸りけん。麻吹き分ける風の隙。六らぬ。御臺所は跡追うて附添ひ給ふ煩さ。赦し給へと宣ふ聲。小家の内なる早苗之。條姫は現はれ出で。袂の下に若君の。心に。心を苦しめ氣を痛め。ヌエテ。走り抜け。介顔差出し見るよりも。なう若君様愛。身を隠す間もありやなし。老母いよたる玉銚の。道の疲れも願みず。急ぐ心。護様。是母じや人く。いよ腹を立て。小冠者め一人と思ひしにやうくと。一村里の木蔭にぞ。フ泣。身をもがき行かんとすれど足立たず。兩に。女郎め迄が隠れ居て。桃を取るさへ腹くく。迎り着き給。暫らく氣息を押。手を舉げて是々と。呼べど招けど聞かば。立つに麻まで荒す憎さよと。又さん續め。跡振返り眺めやり。いまだ程なき事。こそ跡も見向かす打つ杖を。あしらひ兼。ざんに打つ杖を。姫は愛護の楯になり。子なれば追着き給はん悲しさよ。何卒爰を。ねて若君はなう早苗之介爰へ来て。は又母を打たせじと。互に杖の下に寄り。行抜いて比叡山へ登りなば。女人は叶は。めてたも勝重と。お主は杖の下に泣き。子。重見るよりきよつとして。愁の涙忽ちにぬお山と聞く。さあらば此道急がんと心。は坐ながらに泣叫び。やれ勿體なや母じ。孝と戀との二道に我身厭はぬ有様を。勝ばかりは進めども。御所を出でさせ給ふ。や人。廿年來引込んで若君こそは見知ら。眼瞞し肘を張り。胸押摩り氣息を詰め。より。酒飯ふつつと絶え果て。食べさせ。ずとも。形恰好にも面差にも。清平公の。物をも云はず打守る。此世にあらぬ繼母給はねば。しをくと立つ桃林。フ枝も。縁者とは。思し寄らぬか淺ましや。斯く。ぞとヌエテ知らぬ。心は道理なり。若君は高くに見えけるを。是幸ひと杖振上げ。成り果つる憂き苦勞皆御主人への爲なる。聲を上げ。やれ早苗之介胸怒な。現在主丁々と打ち給ふ。老母は見るより腹を。に。武士の冥加も忠誠をも。無になす親の打たるを守り居るのは何事と。云は立て。憎しさもし。小冠者め。其桃搗の恨めしやと。小家を動かし足摺りし。せも敢へず。ア、しやべるまい聞きと

むない。早苗之介はついしかに四足殿に奉公せぬ。主でない家來でない。急いでそこを立つて行く。若君呆れ顔振上げ。ム、主でないならぬ迄よ。四足殿とは誰をいふ。ハ、非道の戀もする氣から。詰開き迄あがつたの。手を引合うてぞらくと面白からう嬉しかろ。世界國土の楽しみに。女と戯ふれ遊ぶ程面白い物はない。此勝重はこなた故獨癡をして居ますぞや。地千に一つも斯様な兎相な事があらうかと。常世をこなたに付けて置いたが。ア、盗人の隙あれど守りての隙なかりしな。大織冠より數百年相續いたる二條家が。今日の只今滅亡した。惣が御家がなければ勝重はどなたに勘當許されて。誰に奉公仕ら腹切つて死ぬる身ぢや。圍まひ度うても圍まはれぬ。

残るのである。地世間へ廣うならぬ内悪い性根を入替えて。館へ歸つて詫びしやれ。只今打擲しられたは。こなたの誠の御袋が。諫めの杖と思しなば。地無念な事も何にもない。急いで京へ歸りしやれへちまうてなりや勝重が。兩人共に打殺すがどうぢやくと責むれども。言譯すれば母様の。御身一つの浮名ぞと。答もやらずさめくと泣く音。ばかりあるらん限りは。二條の若と筆捨つにおはします。地老母はつくづく打守り。今といふ今合點がいた。心中をしに出にならぬ。里をば過ぎて行先も。婆とたのぢやな。爰は日陰で悪からうあの辛崎の一つ松。地首縊るのによい場所と小なれ小波や。志賀の山風吹き荒み。釣す家の戸。フさいて入りにける。若君渡る海士の舟ならで焦れ焦るゝ胸の火に。にくれながらエ、胸慾な早苗之介。たと鹽こそ焼かぬ鳩照燈。當世一人を力草小へ鳥類畜類でも。親子の禮は知るものを。松若松掻分けて。戀する人に大比叡や。年端もいかぬ愛護とて。道ならぬ義のあ坂本にこそ着き給ふ。習はぬ旅に兩るべきか今かゝる身になつたれば。扱は人は。杖を力に弱々と手を引き山に。汝も見捨てしな。神代此方主として家來差しかゝる。地地牛町ばかり登りしが不思議

議や俄に足痛み。胸騒して向ふより突くら。都の勢とて来りしを。曾止不審に思を恨み世を恨み伯父坊恨み親恨み。泣いとはなしにかつばと倒け。先々と進む瓜し召し。夜陰に至つて何故に尋ね来らん。先は剣を渡る如くにて。震ひわななき働様はなし。扱は谷々の天狗ども。阿闍梨がす姫君はつと心付き。誠には愛は唐土の四明の洞を移されて。女人結界なりけるを破らんとせし勿體なや。是に付我笑らじと走り出て。こりやく丁稚。しや。現在お主や我夫の。死ぬる生きるけても世の中に。罪の深きは女の身の女帥の阿闍梨の御一家と騙事言ふ實僧者。ぬは何の因果ぞと。膝と膝とに凭れ合ひかば晴るゝ憂身ぞと。雲入る嶺を打見や。杖を赦して給はれと。手を合はせど。涙押しひまだ佛神の御加護にて。夫の在り。二人はどうと座を占めて。呆れ。果てゝごおはします。折節山も聞入れず。まだ頬粉を叩くかとさん上より山賊一人下り来る。常世嬉しく立ざんに叩き伏せ。門戸を締めて寄せ付け寄りて。申し紫刈殿。比叡山の南す死んだであらうと存じたが。人の命は谷阿闍梨のお寺を尋ねる稚兒。先達つた参られしがいかゞ便りを致さうぞ。教の。そこ迄は来て行き倒れまだうごゝみぞ。我に言問ふばかりにて道行く人もへてたべと宣へば。柴刈り横手をちやうど打ち。身ども夜前その坊の蓋所に居ましたが。夜半の過ぎでもござらうが。ねしに早苗之介といふ者が。穴生の里にちつ居つ。姿も亂れ氣も亂れ。棺に取付門荒げなく打叩き愛護とやら舞子とや居ますれど是が方へも行かれぬと。我身

し。年月沈む戀の海。龜の浮木は得たれ。裏の紅に。長らへば又愛目をも水底の。たか死なせましょ。併し落度の詮議ならども此世の夫と結び置く。帯さへ未だ解。深き心を入りて知らせん。愛護の若と。こなたより先づ伯父坊様。人圍まふは出かぬ間に。未來の妻へ戻すのは。思へば。讀みも終らずこは南無三寶遅かりし家の役他人なりとて捨て給ふは。いづれ淺き縁なり昨日は人に羨まれ。今日は人。泣くも泣かれず歯を喰ひ詰め。足摺の法にある事ぞ。誠不審に思すなら虚を羨むも同じ戀路と三つ瀬川。とても。りしてこそ居たりける。早苗之介は聲質を亂し給ひてこそ。沙門の法も立つべし。勤め給ふぞわりなけれ。若君世にも。なされたなう。御臺此世に亡き人と某何事ぞ。一禮言うて其上に差違へても死嬢しけによくこそ思ひ切り給ふ。煩惱。知らう様はなし。不義と一途に存せし故。なしやれと。ことわり立つれば早苗之介。も是もと菩提。假りの浮世に假りの夢。物柔に申しては。お心は直るまい。誠にさうちや坊主首。いで打落して腹せめては跡の詠めとて。弓手の片袖引き。前が思し切られても。女は離れにくいも。愈んと。馳行かんとする所へ阿闍梨もほどき小指の血汐染め衣に。残し置きぬ。のあた胸慾に云うたらば。館へお歸りな。周章てふためきて。氣息をばかりに御出る泡沫の泡と消えぬる御形見。霧生が溜。散らしたる悪口が。お腹が立つての御最。投げしとは誠ならずと思ひしに。兩人是る杉の枝に結びとめて手に手を取り。散らしたる悪口が。お腹が立つての御最。投げしとは誠ならずと思ひしに。兩人是南無阿彌陀佛と諸共に。涙の溜津水底。期か。母が杖を當てたのが無念でお果て。に居るからは扱は若にてありけるか。地に。入りて形はなき跡も。袖掛けの神杉と。なされたか。追着きます若君様。お供。それとも知らで情なく寺へ寄せざる殘念て今の。世迄も。重へありとかや。然る。に召連れ給はれと。既に自害と見えにと。涙を流し直へば。早苗之介すつ所へ。勝重常世は驅來り姫君いづくにま。けり。常世周章て。取付けば。ヤアと寄り。ヤイ胸慾者の伯父坊主。叡山法師はどれとも人に人を殺すが法なるか。若たる杉の枝。怪しやと見る菊の紋淺黄が。かと振放す手をしつかと取り。成程死に。君へのお手向に坊主首をば賜らんと。反。

打つて突つかゝる。阿闍梨騒ゆる氣色も

なくヲ、尤もく。愛護が命の終つたは

定業なれば是非もなし。愚僧に恨みを殘

したる非業にてあるならば。加持の力で

蘇生せん先づ鎮まれと宣ひて。御衣の

袂を結び上げ水晶の數珠押揉んで。天を

仰いで三禮あり。地を指差して再禮し。淵

に向うて秘印を結び振鈴雲に響かして。

發願をこそ述べられけれ。ヲおほけなく

浮世の。民におほふかな。我立つ袖に。

墨染の袖。志學の春の始めより。經藝の

花香ばしく耳順の秋の夕には。玉泉の水

底清し。瀬田の蓋は孫康が窓に古今を照

らし見て。無明の眠り醒め易し。比良の

高根に。雪降れば。車胤が眼鏡を忘れし

なり。妄執の雲打拂ふ。嵐につれてあれ。

あれく。苦海を渡る船なんめり。彌勒慈

尊の腕をいつと契りて撞出す。コハ。圓城

寺の鐘の音。悉有佛生有明の石山寺の秋

の月。三諦即是目前に止觀の胸を觀念す。

浸染妙有の文字を捨て。法界東流の聲を

離れて一實相の。眼の前には死にもせず

又生れもせず。況や非業の童男童女。ナ

ハス。愛護並びに鳩照姫が。蘇生の效驗

ならしめ給へ。歸命。頂禮金仙氏。佛眼

金輪五壇の法。一字金輪孔雀經。七佛樂

師熾盛光。鳥芻沙摩隨求大佛頂。五大明

王六觀音。六字河臨訶梨諦母。八字文珠

普賢の法。那膜。所願虛空藏天には。三

諦七曜九曜廿八宿別して山王廿一社の大

權現。頓法成就ならしめ給へと責掛け

責掛け。へ祈らるゝ。時に山鳴り。六條

波は渦を巻き上げ巻きおろして。過去拘

は忽然と波の上に現はれ出で。過去拘

留尊佛の昔より愛護と我とは生々世々。

怨敵の餘執故只今命を取つたれども。

大聖の法味を受け成佛得脫致したり。猶

此末を守らんと云ふかと思へば波の底。

形は消えて愛護の若姫君諸共瀧壺より。

手を引合うて出で給へば夫婦は奇異の思

ひをなし。阿闍梨を三拜百拜し二人を二

人が肩にかけ。喜び勇んで立歸る佛力神

力擁護力三つの要に末廣の扇の風や家の

風。松は素直に竹素直く。齡は千龜萬鶴

も。變らぬ常磐堅岩やと傳へて。今も興

じけり

第五

地身體髮膚はたらちねの枝葉まつたき孝

の道。愛護の若君鳩照姫蘇生の喜び祝言

の。祝ひは二つ山王の恵み尊き神祭。七

社の御輿御船に飾り三千の衆徒悉く。甲

冑弓箭帶しつゝ惡魔を拂ふ氣を顯はし。

漫々たる湖水の面ヲ。錦を流す如くなり。

陸には二條の左大臣清平公を始めと

し。權大納言爲道卿若君御夫婦御伴ひ。

時に葵の風薫る水干淨衣みやびに。舍

人牛糞雑色まで。あたりを拂ふ行装は目

を驚かさばかりなり。左大臣清平公參 衆徒を置き。圓融の法も曇なき月の横河 寄らざる一戦故。軍勢心奪はれて、残り 諸の諸人に向ひ。笏取延べて宜ふやう。 も見えたり。扱又麓は小波や志賀辛崎の 少なに討ちなさる。寄せ手はいよく勝 抑も此比叡山と申せしは。王城の鬼門を 一つ松。國家安全長久の齡を見る。つに乗り揉み立て、攻寄せたり。荒 護り悪魔を拂ふのみならず。一佛乗の るしの松。あら有難やと演説あり御手を 木の左衛門早苗之介すは御大事と駈塞が 嶽と申し。麓の御山を象れり。又天台 合はさせ。給ひけり。然る所へ軍勢 り。兩人一所に押並び多勢を前に引受 と號するは四明の洞を移すなり。實相無 一度に合圍の聲を立て合はせ開をどつと けて。はらりと難き倒すさしにも勇 我の春の花時ならずして香ばしく。大乗 ぞ上けたりける。荒木の左衛門駈塞が られ暫し弛んで見えにけり。然る 戒會の時鳥待たぬ先より聲清く。平等 り。こは何者の狼籍ぞ。名乗れ聞かんとあ られ。駿河の前司國則一陣に駈出し。 利益の新月は。二千里の外明らかに。生 問ふにや及ぶ近國折角巧んだ企てが。無 が後様肩先かけに斬込うだり。早苗之 滅滅巳の雪の色都の。富士の名も著き。 なるといひ刺へ姫君迄失はれ。鬱憤 介勝重取つて返しむづと抱き。足踏み 我が立つ袖の袖木挽く。伐木とくくり を散ぜんため右大將有雄卿。御出陣なさ 直し釣上げて大地にどうど取つて伏せ。 んくと。根本中堂文珠樓麓にあたつて れしぞ。清平が首打つて降参せよと罵つ 止め。敵は一人味方は二人あつたら物 を無下にはならじ。それこそなへと引 波止土濃は。智水の波も濃かに和光の。 たり。早苗之介飛んで出でいや推参な 起し左右の腕を引抜きて。寄せ手の陣へ 塵に交はりて。衆生を導き。給ふなり。 りおのれ等。姫は御臺に送るから斬らう 追返すは心地ようこそ見えにけれ。 は。女人の身迄も頼もしや。嶺には。遮 こそあれかゝる神事を妨けて。御輿を 穢す無道者で物見せんと云ふよりは。 大將有雄肝を消し馬引返し逃け引く や。兩陣互に群つて火花を散らし。戦 船中の衆徒太刀長刀觸らば冷せと追 又。一念三千の。機を顯はして三千人の ひける。味方は無勢。殊には又思ひ 取り巻き。神罰冥罰思ひ知れ思ひ知らず

や山王の。神勅なるわと首打落しサア
サア還御を急げや。御輿を渡せや囃せや
觸らば冷せと打つ太鼓。神すゝしめの囃
し言目出度き。國の御守り。